

## 保育園とJAのコラボレーション ～JA秋田ふるさとの子育て支援事業の取組み～

調査研究部 福田 いずみ

### はじめに

かつて地域や家庭では、行政の支援がなくても子育てが自然に行われていたが、社会の変化に伴い、子育ての環境も大きく変化した。特に職住分離、核家族化、地域関係の希薄化、少子化が進んだ結果、親子が孤立しがちになっていることが子育てを困難にさせる大きな要因とされている。

1990年の1.57<sup>1</sup>ショック以降、政府も少子高齢化への問題意識を高め、保育所の拡充などによる子育てと就労の両立支援とともに、在宅子育て家庭の支援にも力を入れるようになった。全国各地で子育て支援の様々な取り組みが始まり、1995年には地域子育て支援センター事業に対する国の補助金が設けられ、市町村や保育所NPO法人などのさまざまな担い手による多様な事業展開が見られるようになった。

現在、地域コミュニティの希薄化が指摘される中、子育て家庭が身近な場所に親子で集まって交流や相談ができるようにと国が設置をすすめている事業に「地域子育て支援拠点事業」がある。その内容には保育所や専門施設などにおける「センター型」事業、公共施設の余裕空間や商店街の空き店舗などを活用する「ひろば型」事業、「児童館型」事業があり、子育て相談、情報提供、育児講座や各種イベント、親同士の交流、育児サークル支援などのさまざまな取組みが行われている。その概要と全国実施箇所数は、資料1、資料2のようになっている。

### 資料1 地域子育て支援拠点事業の概要

	ひろば型	センター型	児童館型
機能	常設のつどいのひろばを設け、地域の子育て支援機能の充実を図る取組を実施	地域の子育て支援情報の情報収集・提供に努め、子育て全般に関する専門的な支援を行う拠点として機能すると共に地域支援活動を実施	民営の児童館内で一定時間、つどいの場を設け、子育て支援活動に従事者による地域の子育て支援のための取組を実施
実施主体	市町村（特別区含む） 社会福祉法人、NPO法人、民間事業者への委託も可		
基本事業	<ul style="list-style-type: none"> <li>子育て親子の交流の場の提供と交流の促進</li> <li>子育て等に関する相談・援助の実施</li> <li>地域の子育て関連情報の提供</li> <li>子育て及び子育て支援に関する講習等の実施</li> </ul>		
従事者	子育て支援に関して意欲があり、子育てに関する知識・経験を有する者（2名以上）	保育士等（2名以上）	子育て支援に関して意欲があり、子育てに関する知識・経験を有する者（1名以上） 児童館職員が協力して実施
実施場所	公共施設空きスペース、商店街空き店舗、民家、マンション・アパートの一室等を利用	保育所、医療施設等で実施する他、公共施設等で実施	児童館
開設日数	週3～4日 週5日 週6～7日 1日5時間以上	週5日以上 1日5時間以上	週3日以上 1日3時間以上

(注)厚生労働省資料[http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dl/kosodate\\_sien.pdf](http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dl/kosodate_sien.pdf)より筆者作成

### 資料2 平成22年度 地域子育て支援拠点事業 全国実施箇所数

(次世代育成支援対策交付金交付決定ベース)

種別	開設日数	箇所数
ひろば型	3～4日	706
	5日	823
	6～7日	393
	出張ひろば	43
センター型		3,201
児童館型		355
合計		5,521

(注)厚生労働省資料より筆者作成

1 1990年の1.57ショックとは、前年（1989（平成元）年）の合計特殊出生率が1.57と、「ひのえうま」という特殊要因により過去最低であった1966（昭和41）年の合計特殊出生率1.58を下回ったことが判明したときの衝撃を指している。

本稿では、地域と行政が協力し合って子育て環境を改善することが求められている中で地域ぐるみの子育て支援の実現に向けて、平成22年度から民間保育園とJAの協働で「地域子育て支援事業」のひろば型を運営している秋田県横手市にあるJA秋田ふるさとの取組みについて紹介していきたい。

## 1. JA秋田ふるさとの概要



資料3 組合員組織

平成21年3月末現在

組合員数	正組合員	12,005人	15,325人
	准組合員	3,320人	
組合員戸数	正組合員	11,243戸	14,420戸
	准組合員	3,177戸	

(注)秋田ふるさとホームページより抜粋

JA秋田ふるさとは、秋田県南部の内陸部に広がる横手盆地の中央部に位置し、横手市と美郷町の一部を含む東西約35km、南北約20kmで、東は奥羽山脈沿いにりんごを中心とする樹園地がちなり、西の出羽丘陵地帯で

は草資源に恵まれて畜産が振興されている。中央から西部にかけては奥羽山脈系を水源とする雄物川流域に水田を主体とする肥沃な耕地が展開し、県内随一の複合農業地帯となっている<sup>2</sup>。組合員組織は資料3を参照。

また、JAは福祉事務所を持ち、ケアプランセンターや訪問看護ステーション、デイサービスセンターやショートステイ、子育て支援などの福祉事業にも積極的に取り組んでいる。

## 2. 横手市平鹿地区子育て支援センター「りんごちゃんひろば」

### (1) 取組みの経緯

JA秋田ふるさとでは、JA秋田中央会が主催する「JA秋田中央会クリエイティブプラン」<sup>3</sup>に応募し、平成15年度最優秀賞を受賞した一女性職員の提案から子育て支援の事業化の気運が高まり、実現に向けて準備をすすめていた。

事前準備として、保健センターに検診に来た保護者に協力を依頼して子育て支援に関するアンケート調査を実施し、地域の子育て事情や、ニーズを把握するとともに、JA運営委員会や青年部、女性部に子育て支援事業に関する説明を行い、JA内部の協力体制を整えた。そして、建物の構造や利便性などから子育て支援に適している醍醐出張所の廃止のタイミングに合わせて、平成22年度から本格的に子育て支援事業を実施することとなった。

この取組みは、大きな収益につながる事業ではないが、地域貢献や地域の若年層にJAを理解してもらおうという趣旨に対し、理事会

2 JA秋田ふるさとHPより抜粋 <http://www.jafurusato.net/jagaiyou.html>

3 JA職員からJA組織・事業運営に関して企画、提言を募り、優秀な提言には褒賞を与えるという制度。

の理解を得られたことも大きな力となっている。

計画当初JAでは、単独で週2日程度の子育て支援事業を予定していたが、実施予定地の近隣で子育て支援センターを受託していた民間保育園（醍醐保育園）が児童福祉法の改正などの理由から事業を拡張しなければならなくなっており、常設の「ひろば事業」の協働運営をJAに提案してきた。横手市においても、同じ地域に事業が重複することは避けたいという意向をもっていった。このような経過から保育園とJAの協働運営方式の「りんごちゃんひろば」が誕生した。



## (2) りんごちゃんひろばの運営

### 資料4 「りんごちゃんひろば」開催日等

開催日	月曜日～金曜日
開催時	午前9時半～午後3時半
休日	土曜日、日曜日、祝祭日、年末年始(12月31～1月3日)
利用料	無料(イベント実施の場合、参加料が発生する場合があります)

(注)「りんごちゃんひろば」パンフレットより抜粋

りんごちゃんひろばでは、月曜日から金曜日まで毎日、午前9時30分～午後3時30分まで地域の子育て家庭に施設を開放し、子どもの遊び場、親子の交流の場、子育て相談の場

としている。利用料は無料でスタッフ4人が常駐し育児相談等にも応じている(資料4)。

さらに、親子の遊び、季節行事、体験行事、講座などを内容とするイベントがひろばの施設内や、近隣の公共施設や戸外などで実施されている。

### (3) 2つの事業主体

りんごちゃんひろばの事業は、醍醐保育園が受託する横手市平鹿町子育て支援センターの事業と、JA秋田ふるさとの事業が相互に補充し合って成り立っている。これは子育て支援事業の実施形態として、全国でも珍しい例である。それぞれの事業内容については、資料5のとおりとなっている。

「りんごちゃんひろば」に常駐する4名のスタッフは、醍醐保育園から2名(保育士)、JA秋田ふるさとから2名となっている。子どもの発達や健康などの専門知識を要する業務は保育士が主に担当しているが、子育て情報誌の作成も含め、その他の事業は双方の職員が境目なく協力し合っている。

イベントに関しては、醍醐保育園が主体と

### 資料5 「りんごちゃんひろば」事業内容

横手市平鹿町子育て支援センターの事業	JA秋田ふるさとの事業
子育て親子の交流の場	
子育てサークルの育成 育児講座 育児相談 子育て支援だより『ひまわり』発行 乳児家庭全戸訪問 りんごちゃん教室(年10回開催) 出前保育(検診時の保育と遊びの指導)	親子向けイベントの開催 農業体験・食育活動 よこての野菜・果物の直売 高齢者福祉との交流 JAグループと連携した情報提供 相談活動

(注)「りんごちゃんひろば」パンフレットより筆者作成

なって横手市平鹿町子育て支援センターの事業として実施するもの（年10回のりんごちゃん教室）と、JA秋田ふるさとが主体となって実施するもの（JA青年部や女性部の協力によって行うもの）とがある。

#### (4) りんごちゃんひろばの設備

JA秋田ふるさとの旧醍醐出張所を改装した施設は、カーペット敷きの広く清潔なスペースで、子どもも大人もゆったり過ごせる環境が整えられている（資料6）。

ホール中央の広い遊具スペースを囲むように、子どもが自由に使える各種の遊びのコーナーが設けられているほか、親同士の交流もできる飲食スペースや、授乳に利用できる畳



飲食スペース

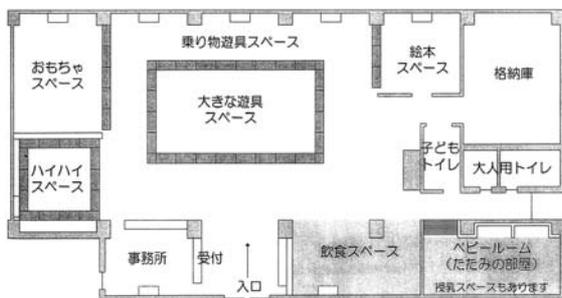
の部屋もあり工夫が凝らされている。また、JR醍醐駅から至便な位置にあるため、電車で訪れる利用者もいる。

#### (5) 利用者の状況

りんごちゃんひろばの利用者層は、他から横手市に移ってきた転勤族などが中心であり、かつ第一子での利用が多い。これは、慣れない土地で初めての子育てをしている利用者が多いことを意味している。これとは対照的に、地元の家族の利用者は少ない。その主な理由として、母親が出産後も就労を続けることが多い地元の家庭では、子どもを0歳あるいは1歳から保育園に入園させるためではないか、というのがスタッフの見解である。

また、りんごちゃんひろばの特徴として挙げられるのは、他の地域と比べて祖父の利用が多く、リピーターとして定着していることである。祖母は家事などで忙しいため毎日のように利用しているという祖父へのヒアリングでは、「住んでいる集落に乳幼児がいないため、子ども同士のふれあいを求めてここにきている」「市内の子育て支援センターはほとんどが保育園の中に設けられているので、

資料6 りんごちゃんひろば平面図



大きな遊具スペース



おじいちゃんといっしょ



交流の輪

保育園に何らかのかかわりがないと入って行きづらいが、ここは独立の施設なので気がねなく利用できるのが助かっている」とこの地域の子育て環境と母親以外の保護者が支援センターを利用するときの心理を聞くことができた。

りんごちゃんひろばをよく利用しているという母親たちへのヒアリングでは、市内の他の子育て支援センターに比べ「スペースが広く、設備環境が整っている」こと、「食育に関するプログラムが充実している」ことがここをよく利用している理由として多く挙げられていた。また、セルフサービスのお茶が飲め

る「飲食コーナー」は、持参したお弁当やおやつを一緒にとりながら、利用者同士の交流できるのがうれしいと好評であった。

そのほかにも、「一度来ただけでスタッフが子どもの名前をすぐに覚えてくれて声をかけてくれるのがうれしくてまた来たくなった」「一人一人の子どものことをよく理解してくれている」「誰が来ても親切に接してくれる」などの利用者の声からは、スタッフへの信頼度の高さをうかがい知ることができた。

資料7～9は22年度のりんごちゃんひろばの利用者のデータである。この資料から、主に0歳から3歳までの乳幼児を連れた母親が利用していることがわかる。これは他の支援センターでも同様であるが、祖母と同等に祖父の利用割合が高いところがりんごちゃんひろばの特徴である。

資料7 りんごちゃんひろば利用者の状況

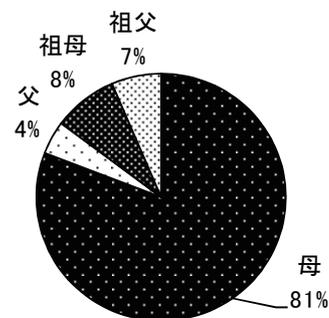
利用者数	乳 幼 児	3,115人
	保 護 者	2,718人
	合 計	5,833人
	1日平均	24人

(平成22年度稼働日数 244日)

(注)りんごちゃんひろば

平成22年度 利用者統計より筆者作成

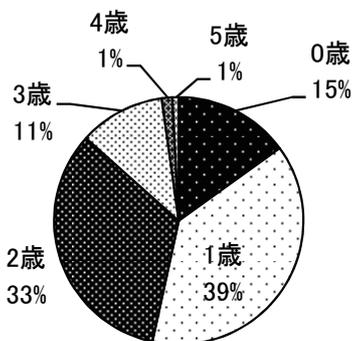
資料8 利用者（保護者）の割合



(注)りんごちゃんひろば

平成22年度 利用者統計より筆者作成

資料9 利用者（子ども）の年齢別割合



(注)りんごちゃんひろば  
平成22年度 利用者統計より筆者作成

#### (5) スタッフの状況

りんごちゃんひろばの大きな特徴は、醍醐保育園とJAのコラボレーションがうまく機能しているところである。開設当初は、醍醐保育園とJAの両者間で運営等に対する意見の相違もあったが、話し合ううちに互いに学び合う関係になったという。

醍醐保育園では、以前から子育て支援センターを運営しており、JAと協働運営する際も以前と同様に運営していく予定でいた。しかし、JA側から出される様々な「遊び心」のある提案を受けて、専門的に固まっていた運営に外の風が入り、柔軟な考え方ができるようになったという。例えば、りんごちゃんひろばの「飲食コーナー」の設置は、JA側からの提案が結果的に母親たちに喜ばれる取り組みにつながっている。

一方、子どもの発達や健康その他、専門的な知識や経験が必要な場面では、保育士が中心的な役割を果たしている。保育士は乳幼児健診での出張保育にも携っており、日頃から保健師と連携する関係を持っているため、地

域の子育て家庭の状況について情報交換をしながら相談や援助を行っている。JA側は、こういった専門的な支援は保育士がいなければできなかったと認識している。

醍醐保育園の保育士とJA職員は、閉所後のミーティングにおいて1日を振り返り、子育ての当事者でもあるJA職員の母親目線と保育士の専門家目線をうまく融合させながら運営をすすめている。

### 3. JAが子育て支援に取り組んだことの意義

本稿で紹介したJAの子育て支援の取組みが、地域の中でどのような価値や可能性を生んだのか。調査に同行した子育て支援の事情に詳しい専門家の意見や、横手市の子育て支援課の担当者へのヒアリング結果を交え、今回明らかになった3点について以下のとおりまとめた。

#### (1) 交流の場の提供

利用者の声に「集落の中に他に乳幼児がいない」というものがあつたが、少子社会ではこのような子育て環境（子育ての孤立化）が、親にとっても、子ども自身にとっても成長の過程において妨げとなりがちである。そのような背景を考えると、子育て支援センターとして誰もが遠慮なく利用でき、親子が交流できる施設（場所）を、JAが地域に提供したことは大きな価値を生んでおり、地域への貢献度は非常に高いものとなっている。

また、保育園とJAが協働運営したことによって常設（週5日）の子育て支援事業を実現できたことも、この地域にとって大変望ましいことである。

## (2) ニーズの顕在化

スタッフであり、子育ての当事者でもあるJAの職員が事業に加わったことが、従来保育園が実施してきた子育て支援に新しい風を吹きこみ、保育園という専門施設でとらえきれなかったニーズを別の視点から提案し顕在化させている（飲食コーナーの設置などはその一例である）。

これからも子育て経験を持つJAの職員が母親（利用者）の身近な相談相手となっていくことで利用者ニーズを引き出し、運営内容の質の向上へとつながっていくのではないかと。

## (3) 食農教育

食農教育という視点から実施されている農業体験や郷土料理の提供などは、青年部、女性部といった組織や資源を持つJAならではのものである。また、JAがバックアップして行う地域性の高いイベントは、核家族化が進む中で伝統文化の継承という意味においても大きな意義を持っている。

このようにJAが、自らの持ち味を生かしながら支援に加わった結果、りんごちゃんひろばは、行政直営の子育て支援センターとは違った存在感を発揮するようになった。「地域ぐるみの子育てを実現している空間」と、横手市役所子育て支援課の担当者も高い評価を与えている。

食農教育、農業の振興とともに、地元への愛着を高めることにも少なからず貢献しているといえるのではないかと。

## 終わりに

子育てを地域で支えていくためには、専門性や立場を越えて、地域の中できちんと手を携えていくことが大切である。本稿で紹介したりんごちゃんひろばの取組みは、地域に点在していた支援を面としてつなぎ、保育園とJAが協働することで子育て支援のネットワークを形成している先進的な事例である。

また、当初からこの事業にかかわっている醍醐保育園の保育士は、「JAとは無縁だった利用者や関係者がりんごちゃんひろばをきっかけにJAと出会い「JA」という言葉をしばしば口にするようになってきている」とここに集う人々の変化を客観的に捉えている。このことから、JAが分け隔てなく誰にでも開かれた子育て支援の場を地域に提供し、支援者として弛まぬ努力を続けたことが、間接的にはあるが、JAの存在感の強化につながってきているといえるのではないだろうか。

人と人、そしてJAと人をつなぐこのような取組みが、地域貢献とともに、若い世代に「地域にある組織・JA」を広くアピールし、親しみをもってもらえるきっかけとなるよう期待したい。

## 参考文献・資料

- ・JA全中『JA子育て支援全国シンポジウム平成21年11月17日』テキスト
- ・浅井春夫編著（2006）『子ども福祉』建帛社
- ・横手市子育て支援課『横手市平成22年度版子育てガイドブック』
- ・松原康雄・山縣文治編著（2006）『児童福祉論』ミネルヴァ書房